



| | |
|--------------|---|
| Title | 無上の喜び、そして誇り：斯波義信名誉教授、山崎正和名誉教授 文化功労者顕彰記念号に寄せて |
| Author(s) | |
| Citation | 大阪大学大学院文学研究科紀要. 2008, 48, p. 1-2 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/8757 |
| rights | 本文データはCiNiiから複製したものである |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

無上の喜び、そして誇り

—斯波義信名誉教授、山崎正和名誉教授 文化功労者顕彰記念号に寄せて—

文学研究科長
天野 文雄

平成18年の秋、まことに晴れがましいニュースが文学研究科にもたらされた。文化の向上発展にすぐれた業績をあげた者を対象とする文化功労者に、文学研究科の大先達である斯波義信先生（東洋史）と山崎正和先生（演劇学）の両先生が同時に選ばれたからである。文学研究科としては、これまで昭和57年の原亨吉先生（フランス文学）の学士院恩賜賞などの受賞例はあったが、文化功労者はこのたびがはじめてで、しかもお二人同時という快挙である。文化勲章受章者、文化功労者を少なからず出している大阪大学全体からみても、このたびの栄誉は特筆にあたいするできごとであり、それを記念して『大阪大学文学研究科紀要』41号を記念号にという声が起ったのは、ごく自然なりゆきであったと思う。しかも、斯波、山崎両先生からは、両先生ならではの創見と意欲に満ちた論稿を寄せていただくことができたのは、わたくしたちには望外の喜びというほかはない。かくして、本号は両先生の論稿を巻頭に、それに現在の文学研究科の教員の気鋭の論稿を配して、このたびの両先生の栄誉をお祝い申しあげることとなったわけである。

斯波先生が寄せてくださった論稿は、平成19年4月24日に文学研究科の第1会議室で催された東洋史研究室の主催による講演会での同題の講演をまとめられたものであるが、その講演会が催されるについては、やや意外な事実がひとつの伏線となっている。というのは、斯波先生は、昭和44年から昭和60年まで文学部に在職されたのだが、じつは先生は昭和60年の退職時には大阪大学から名誉教授号を授与されていない。当時の大阪大学の名誉教授授与規定では、大阪大学に教授として20年在職することが要件とされていたためである。そこで、文学研究科ではこのたびの文化功労者選定をうけて、斯波先生を大阪大学名誉教授として推薦し、おくればせながら大阪大学から名誉教授の称号が授与されたのであるが、斯波先生はこのことをたいへん喜ばれて、称号授与状をわざわざ東京から受け取りに来られるという。そこで、それだけで大阪に来られるのはあまりにもったいないということで、上記の講演会が実現したのだが、その直前に、研究科長室において、わたくしはまことに僭越ながら、はじめてお会いした硯学に授与状をお渡しし（小職の着任は斯波先生が転出された昭和62年秋で、先生とは面識がなかった）、先生が室町幕府の管領を務めた斯波義将の後裔で、わたくしの研究対象である世阿弥とも縁があることなどを話題にさせていただいた。その後のご講演はわたくしも拝聴したが、中国商業史における諸問題を広い視野と具体的な史料とによっ

て論じたもので、先生のご研究の一端にふれることができたという充実感をおぼえたものであった。

山崎先生が寄せられた稿は、平成7年に先生が定年まで2年を残して大阪大学を退職されたときの、芸術ブロックで組織している待兼山芸術学会での講演をもとにしている。講演の会場はシグマホールだった。このたび寄稿をお願いしたときに、既発表のものでもかまいませんと申しあげたところ、先生は、「いや、新しいものを書きます」とおっしゃってくださったのだが、12年前のあの講演がまだ活字になっていないことを思い出して、そのことをお伝えすると、即座に快諾してくださったのである。はたせるかな、活字に起こされた論はいまもまったく色あせていず、20世紀の演劇を文化や社会状況をも視野に入れてあざやかに鳥瞰し、現代演劇の位置づけにまでおよんだ、山崎先生ならではの犀利でスケールの大きい文明批評的な論である。この稿では、先生の講演が終わったあとに、当日の質疑応答が付け加えられているが、じつはこの質問者は、当時、演劇研究室の助教授だったわたくしである。その半年後の秋、山崎先生の退職記念として、梅田の新阪急ビルで「現代演劇のゆくえ」のテーマで、あらためてこの問題についてお話しをしていただいたのも、この質問の続きという意図があったように思う。そういえば、その講演もまだ活字になっていないが、それはともかく、『文学研究科紀要』を文化功労者顕彰記念号にしたいとお伝えしたところ、先生が何度か「光榮です」とおっしゃったことを、ここに記しておきたい。

わざわざ東京から文学研究科までおいでくださった斯波先生、このたびの紀要が記念号になることを「光榮」といってくださった山崎先生、わたくしたち後輩も、このような文学研究科にたいする両先生の思いにこたえるべく、研鑽をかさねてゆくことをお誓いして、両先生の文化功労者顕彰記念号の序とさせていただくしだいである。